

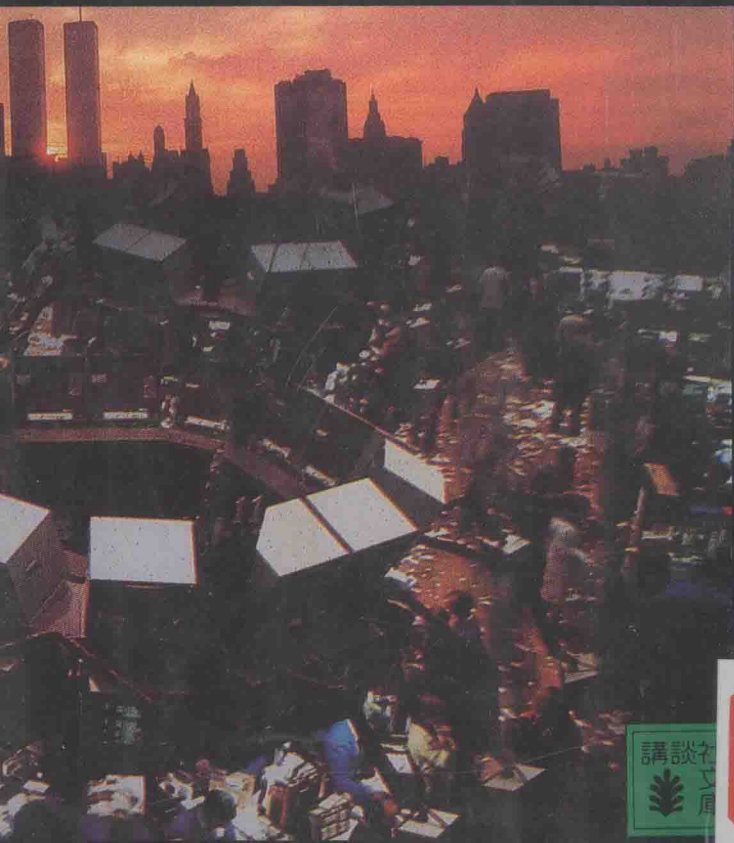
オイル・ギャンブラーを追いつめる

ニューヨーク油田地帯

THE BEARS REQUIEM by Peter Cunningham

ピーター・カニンガム 翔田朱美=訳

下



講談社
文庫



| 訳者 | 翔田朱美 1948年生まれ。早稲田大学文学部卒業。翻訳者。訳書に『F1-死への疾走』『スパイを連れた女』(講談社文庫)等がある。

ニューヨーク^{ゆでんちたい}油田地帯(下) オイル・ギャンブラー^おを追いつめろ

P. カニングガム | 翔田朱美 訳

© Akemi Shoda 1991



講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

1991年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。(庫)

ISBN4-06-184995-6

江苏工业学院图书馆
藏书章
ニューヨーク油田地帯 (下)

オイル・ガンブラーを追いつめろ

P.カニンガム | 翔田朱美 訳

講談社

目次

ニューヨーク油田地帯(下)

訳者あとがき

THE BEAR'S REQUIEM

by

PETER CUNNINGHAM

Copyright © 1989

by

Peter Cunningham

Japanese language

paperbackrights

arranged with

David Grossman Literary Agency

London

through

Tuttle-Mori Agency Inc.,

Tokyo

ニ
ユ
ー
ヨ
ー
ク
油
田
地
帯
(下)

●主な登場人物

ステイヴ・オサリオ ギルトストック社の

社長

クリステイ・オサリオ ステイヴの妹。ウ

オール・ストリート・ジャーナルの記者

ロン・スピラキス ダースト銀行つきの弁護

士

ブレント・オサリオ ステイヴの父親

カーリー・トレマイン ステイヴの許婚

ダッチ・トレマイン マンハッタン・ファー

スト銀行会長。カーリーの父

エリック・ゲルハルト 地質学者

ヴィンス・カーベントー ギルトストック社

の社員

アーメッド ガブリエル・ホールディングス

社の代表

マルコム・フィンチ ステイヴの部下

ジェイ・コックス ステイヴの部下

ジェイコブ・ランデイ マンハッタン・ファ

ースト銀行社長

レイ・レナード ステイヴの部下

シェリル・ラインスター ステイヴの部下

サリーム サウジアラビア皇太子

第十三章

ニューヨーク

二月二十八日 木曜日 午後九時

きらめくように流れる音符はフランツ・リスト。ニューヨーク州とニュージャージーにまたがり、ハドソン河沿いにそびえるパリセード峡谷にきらめく灯。

室内はあたたかい。

八二年のセントジュリアンの煙草の香り。

クリステイがキツチンからウッドの大皿にチーズを三種類のせてやってくるのをながめて、ロスはほほえんだ。とろけるようなカマンベール、ポンレヴェック、そしてところどころにハーブが混ざるカンボゾーラ。大ぶりのソファのロンのわきに腰をおろして、クリステイはポンレヴェックを切り、一切れ口のなかに放りこんだ。彼女は目を閉じてソファに身をせずめ、滝のように

ほとぼしる旋律に聞き入った。

「外の連中にもいっておけ」ロンがわざとくずれたアクセントを真似している。「明日は仕事はないぞ、わかったか？ 国民の祝日だ、陛下じきじきのお達しだからな」

クリステイがロンに笑いかけ、彼の手をとる。それから視線をはずして、二人して音楽に酔いしれた。

「マンハッタン・ファースト銀行がきょう、とうとうステイーヴの資産をすべて差し押さえたわ」と、クリステイがしゃべりだした。「連邦裁判所に破産宣告の申請もするつもりらしいの」

ロンはホワイト・チーズをビスケットのうえに塗って、暗澹とした顔つきで首をふった。

「さっき自宅に電話したんだけど、電話をはずしてあるらしいのよ」

「どんなにつらいことか」ロンがいう。

クリステイは小さな拳をにぎりしめた。「ビジネスはビジネスだつてことはわかってるわ、でもあのトレマイン一族っていうのはちよつと変わってるもの。ダッチ・トレマインは長年ほしがっていたトレディング会社をみごとわが物にしたわけよ。それにあのカーリーだつて、全然そっけないじゃない。あの連中はそんなもんよ。血も涙もないんだから、それにしても……」

「わかってるよ」ロンがやさしくなだめた。

「あなたがどう思ったかは知らないけど」クリステイが続けた。「ステイーヴは彼女のいったいどこを見ているのかって、わたしは疑問を感じたのよね」

「きっと彼もいまごろ、そう自問しているさ」

「兄はほんとうに彼女を愛していたと思う？」

その質問の答えをロンはじつと考えこんだ。「ステイーヴは愛していると思ひこんでいたんだろう」ようやく、そう答える。「彼女にぞっこん惚れていたんだと思うね、あの美貌や、どこにいても物おじしないおおらかさ、そして彼女について回る富と特権の匂い。だが彼が愛したのは、本人自身よりもそういうイメージだったかもしれない、その二つの違いを区別することはむずかしかつたんじゃないだろうか」

クリステイはロンを愛おしそうにながめた。智者のふくろうじいさん。けっして動じることがない。ところがロンはまた、わたしがいなくてもやっていける自分だけの世界ももっているのだ。いまだってそうだ。なにを考えているのか、けっして自分の本心を明かそうとはしない。十日ほど前だって、彼の家のバスルームのペンキ塗りをしていたとき、ヒューストンからレンタカー会社で電話をかけてきたことがあった。あとでヴァーモントのご両親に会いにくつもりだと話してはくれたけど。

でも秘密があるからどうだっていうの？ だれだってひとつや二つ人に知られたくないことはあるわ。とにかくまだ、二人のつきあいは浅いものだから。

クリステイは音楽と、芳醇なワインを心ゆくまで味わった。

「ステイーヴともあろう人が一〇〇万や二〇〇万の隠し財産をもっていなかったなんて、ほんと

に信じられないわ」

「もっていてほしいね」ロンはそう答えた。

「ぜったい必要になるわ。ウォール街というところは、勝てば官軍、負ければ賊軍。敗者には冷たいところですよ」

クリステイのアパートの部屋は彼女らしいインテリアだった。整然としたスペースに、磨かれた床には上質の敷物、書物や印刷物のつまった本棚。コーナーにはテーブルの上にワープロとプリンターがおかれている。

「わたしがなにを考えているかわかる？」クリステイが訊いた。

ロンは首をふる。

「わたしがいま追いかけている石油の記事とギルトストックの事件にはなんらかのつながりがあるとにらんでいるの」

ロンが表情をしかめた。

「ほんとにそう思うの」クリステイはいった。「月曜日のわたしの書いた石油と日本に関する記事を読んでくれた？」

「きみの記事は、コンマまでちゃんと読んでいるよ」

「わたしの勘じゃ、ギルトストックはどこかで関連しているはずよ。土曜日にステイヴと会って、そのことを話してみたの」

ロンは、さすがといったようににやりとした。「きみの記事はお偉がたにも警鐘を鳴らすきっかけになるんじゃないのかな」

「そうだといいわ」クリステイがうなずいた。「ほかの人たちもあのメッセージを取り上げて、役立ててくれるといいけど」

「だが、ギルトストックがいったいどういうふうに関連しているんだい？」

「記者としては、そういうことは絶対外に洩らさないように教育されているの」クリステイはいたずらっぽくいった。

ロンがしかたなきさそうに肩をすくめる。「お好きなように」

「いまのは冗談よ」彼女はちよつと唇を噛んだ。「よく電話がくるの。男の人よ。かほそい声で、名前は明かそうとしないの。わたしにひとつの考え方のヒントをくれているのよ」

ロンの顔がくもった。

「大部分の電話はろくでもないものよ」と、クリステイが続ける。「でもその電話はどこかちがうの」

ロンはげんな顔つきだ。それを見てクリステイはほほえむと、彼によりかかり、ふたたび彼の手を自分の手のなかに握りしめた。

「その密告者はね」静かな口調で、「最初、サウジのことを指摘してくれたの、つぎに日本のこととを。そしてこんどは石油に関しては、水面下の事実が驚くほどたくさんあるんだっていろいろの。」

ほんとうの記事をものにしたかったら、NYMEX、つまりニューヨーク商業取引所に注目しろというのよ。」

ロンは疑わしそうな顔つきをしている。

「それできみはどうするつもりなの？」とうとう、彼はそう訊いた。

クリステイはチーズを一切れ切ると、それを噛んだ。

「お給料をもらっている分の働きはするわよ。もうちょっと掘り起こして、なにかあるのか見きわめるわ」

「どこから手をつける？」ロンがたずねた。

「原油市場からよ、NYMEXの」と、クリステイが答える。「匿名の密告者はまた一両日中に電話をくれると聞いていたわ」

「本物の内部告発者だな」といって、ロンは笑った。グラスを回して、ワインの馥郁たる香りを楽しんでいる。

クリステイは両脚をソファの上で折り、ロンの腕に腕をからませて、彼に頭をよりかからせた。

「ステイヴもあと一步というところだったのに、ちがう？」静かにいう。「大物オサリオ登場。父がどんなにか鼻高々だったでしょうに」

「まだ彼のこと、そういつてしまうのはいけないな」ロンがたしなめる。「物事は結局はしかる

べき方向に落ち着くものだよ」

「兄のそばに素晴らしい女性がついていてくれるといいのよね」クリステイからため息がもれた。「まるで人生が変わって見えるのに」

「そういう女性とめぐり逢うのもなかなかむずかしいことなんだ」と、ロンはやさしくいって、彼女の唇を求めた。

第十四章

1

ニューヨーク、ソーホー

三月一日 金曜日 午前一時

静かな寢息がスタジオに聞こえている。建物のなかも外もしーんと静まり返り、寢息の音だけがその静寂を破っていた。シェリルは読みさしの本をおいて、裸足のまま寢室のほうへ歩いていく。スタジオのベイ・ウィンドーは床から天井までの一枚ガラスでカーテンがなく、外からの黄色い明りがとおってくる。彼女はよくそんな暗がりにはじつとうずくまれていることがあった。そこは生活のなかの大事な片隅、特別な世界だった。夏のあいだは窓のそばにマットレスを寄せ、そこで眠った。そうすると朝早くから目ざめ、早起きの鳥たちと窓辺で絵筆をとることがで

きる。

寝室でシエリルは服を脱いだ。裸のまま白いナイトガウンに手をのばし、ふとその手を止めた。壁の鏡に映った自分の姿をふり返る。

「さあ、点数をつけてごらんさい。ヘアには少しばかりお金がかかっているかもしれないけど、ちょっと張りがいいわね。でもそのほかはまあまあよ。顔のほうは、輪郭はすっきりして、文句なし。乳房はいつだって引きしまっていて形もいいし、肩も幅広くてステキよ。」

両手で乳房をつつみこみ、身体をななめにして鏡に映してみた。父親似で新陳代謝はよく、お腹はほとんど出ていないが、べったんこでもなく、背中はやつと張りすぎかしら？ もう一度正面を向く。脚と太ももはまだほっそりと形よかった。

シエリルはナイトガウンをはおると、ブラシを手にとつて五分ほど勢いよくブラッシングをした。それから寝室を出て、規則正しい寝息の聞こえてくるとなりの部屋に行つてみた。

ベッドのわきに立ち、見おろす。眠っている彼は、心配を忘れた顔をしていたが、なぜか別人のように見える。もつとふけこんで。

バカな女だと、人はいうだろう。しかし、ここに眠っている男があつた魔法を使う男、そしていま崖っぷちに立たされている男なのだ。完璧だった面ざしに、いまはやつれが見えていた。その顔でオサリオは危機が迫っているあいだ会議室でがんばっていたが、いま石油は底値に達し、シエリルはけつして忘れることのできないほどの打撃を受けた。彼の自信に満ち、なにごとにも動